

カリヨン

CARILLON

日本赤十字秋田看護大学 日本赤十字秋田短期大学

P2-7... 1年間を振り返って

P8-14... **特集** 『防災』^{って} 楽しくない?

P15..... 学生インタビュー
学食人気メニュー
教員のつづき

P16..... オープンキャンパス
公開講座のお知らせ

2017



○カリヨンは（フランス語：Carillon）
教会の塔などに吊り下げられる音程を異にする多数の鐘。16世紀以来、特にフランドル地方（現フランス領）で発達し、自動装置を持つものもある。赤十字の理念より「人道・博愛・奉仕」を3つの鐘に投影した大学のシンボルとして、平成8年の短大開学時に設置された。これにちなんで本学学園祭も「カリヨンの祭」と呼んでいる。

No.06





平成28年度イベント・活動報告! 1年間を振り返って

スポーツで汗を流したり、友情を深めたり、防災について深く学んだり…。日々充実したキャンパスライフを送る日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学の学生達。授業や実習だけではない、1年間を振り返ります。



入学式

4月6日

平成28年4月6日(水)、保護者やご家族の皆さま、来賓や実習施設指導者など多くの方が見守る中、期待に胸を膨らませる新入生が日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学に入学しました。

平成二十八年度
日本赤十字秋田看護大学
日本赤十字秋田短期大学
入学式会場



新入生交流会

4月23日・24日

新入生が一日でも早く大学に慣れて充実した学生生活を送ることができるように、先輩学生や教職員と一緒に秋田県大湯村の「サンルーラル大湯」にて2日間の新入生交流会を行いました。





宣誓式

4月28日

学 内での学びを経て本格的な長期の施設実習に臨む、看護学部3年生と介護福祉学科2年生が、対人援助のプロフェッショナルを目指し、自らの目標を再認識し、誓いを新たにしました。



赤十字キッズタウン



赤十字キッズタウン2016

5月21日

こどもたちが赤十字職員となり、親子一緒に赤十字を知っていただく、秋田県内の赤十字全施設合同で実施する恒例の体験型イベント。初めて本学体育館で開催しましたが、学生たちは本学ブースでの体験サポートのほか、県支部・病院・乳児院・血液センターの各ブースでもボランティアスタッフとして活躍しました。





赤十字 みんなの防災キャンプ 6月25日・26日

学 生 58 名が参加して開催。悪天候の合間をぬって、災害時に医療拠点などで用いる大型のドラッシュテント設置・撤去作業をはじめさまざまな場で活用できるロープ操作等々、防災に役立つスキルを学んだ2日間となりました。

赤十字みんなの 防災サマーキャンプ 7月30日・31日

選 難所設営」をメインテーマとし、「防災に役立つスキルを楽しく学ぶ」ことを目標に進めました。本学学生・卒業生に加え、秋田大学・国際教養大学など他大学学生なども参加して開催しました。また防災キャンプへ関心を持たれた秋田市消防本部の方々の視察もあり、地域交流の輪が広がっています。



スポーツフェスティバル 7月2日・3日

バレーボール、バスケットボール、野球、サッカーなど、多くの学生たちが体育館やグラウンドで汗を流し、互いの友情を深めました。



夏・秋の オープンキャンパス

7月23日

9月10日

学びを体験できるイベントが盛り沢山の
本学オープンキャンパス。体験学習や
模擬授業、キャンパスツアー、隣接する秋
田赤十字病院の協力によるドクターヘリ見
学体験などの体験イベントや説明会を実施。
たくさんの受験生や保護者の皆さんに参加
いただきました。





防災キャンプフェス & カリヨン祭

9月24日・25日

本 学グラウンドを会場に「2016AKITA 防災キャンプフェス」が開催されました。本学をはじめ、秋田赤十字病院、日本赤十字社秋田県支部、秋田赤十字乳児院、秋田県赤十字血液センターが連携しました。秋田市消防本部のはしご車見学や、赤十字体験ブース、ワークショップなど、2日間で約4,500名の来場がありました。本学最大の学生イベント「カリヨン祭」も同時開催され、多くの参加者で賑わった2日間でした。





災害救護訓練

9月20日・21日

実際の大規模災害現場を想定した模擬災害救護訓練を実施しました。集結、オリエンテーション、トリアージ、応急処置、テント設営、搬送、傷病者役、炊き出しなど、多彩な内容で行いました。本学の災害救護訓練は平成20年度に教育GPとして文部科学省から認定を受けた事業の一環としてスタートし、原則として毎年1回、全学的な取り組みとして継続して実施しています。





「防災」の魅力に引きずりこまれてしまった人

赤十字地域交流センター長
看護学部 教授
廣渡 太郎 先生

特集：赤十字・防災キャンプ請負人が語る

『防災』



「防災」の魅力に取り憑かれてしまった人

及川真一先生

赤十字防災ボランティアステーション
介護福祉学科 助教

リーダー

及川先生の研究室には、防災キャンプで使用するテントをはじめとしたアウトドア用品がたくさん置かれています。「熊本地震の際、ボランティアとして個人的に現地へ赴きテントを配り、こういったアウトドア用品がいかに災害時に役立つか実感しました」（及川）。

災害が発生したときに最も重要なことは、命を守ること。その方法を楽しみながら覚えてもらおうとスタートしたのが「赤十字みんなの防災キャンプ」です。この取り組みを統括する廣渡太郎先生と、企画運営を行う及川真一先生に話を伺いました。

ついでに楽しくない？

『防災』って楽しくない？

忘れてはいけないキーワードは、“東日本大震災”。



人も家も町も、何もかも奪っていった東日本大震災

—— 防災キャンプがスタートした経緯を教えてください。

及川 防災の取り組みを始めたきっかけは、2011年3月11日に起きた東日本大震災です。私は地元の仙台に住んでいました。これまで体験したことがない大きな揺れの中で、自宅は全壊してしまいました。私は偶然にも命が助かったわけですが、生かされたからには「何か役に立ちたい、自分に何ができるだろうか?」と考えました。そんなときに本学への勤務が決まり、同年4月1日に秋田へと引越すことになったんです。被災地ではまだ避難所での混乱がおさまらず、遺体捜索も続いていたのに、秋田には住む場所も食べるものもある。そのギャップがすぐには受け入れられず、仙台に帰ろうかと悩みました。でも現実的には無理ですよ、家族との生活もありますし。だから「秋田でできることをやろう!」と思いました。私はアウトドアが大好きで、そのノウハウを持っていました。また友達を作るのも得意でした。それで、アウトドアのノウハウを活かして、何かできないか考えたんです。そこからスター

トしたのが、『こどもサマーキャンプ』です。東日本大震災から5カ月後、2011年8月のことでした。

廣波 震災後、秋田は東北のなかでも被害が比較的少なかったのですが、こどもも大人も海を避けるようになっていました。水が怖くて海岸に近寄れず、海で遊べなくなってしまったんです。そこで及川先生は、そんな秋田のこどもたちを集めて、海で楽しみながら命を守る方法を教えようと思立ったんですね。

及川 秋田県は東北の中でも震災の影響は比較的少ないにも関わらず、こどもを含めた地域の方々には、海を避けている印象を受けました。そして私自身も趣味がサーフィンでしたが、海に行くことをためらっていた時に、仙台市若林区荒浜に住んでいた教え子から「海に入ってください」「津波によって自宅も全て失ったけど、海から逃げないでください」と連絡が入りました。そして、サーフボードを持って海で知り合った方にたくさんのメッセージをボードに書いてもらい、ここから私の秋田での活動がスタートします。自然は時に猛威をふるうこともあり



及川先生が仙台の教え子から譲り受けたサーフボードには、秋田の友人からの寄せ書きが



大勢の友人・知人がボランティアとして参加(2011年)

ますが、それだけじゃないことを伝えたいと思いました。特にこどもたちにとって自然の中での活動は、自然と調和して生きていくことの大切さを理解するだけではなく、〈決まりや規律を守ること〉、〈協力することの大切さ〉や〈自ら実践し創造する態度を学ぶ〉、などの教育効果も期待できます。そこで、大自然から遠ざかりつつある秋田のこども達へ、大自然の中で学ぶ体験プログラムを「海」で行いました。この企画では、秋田で知り合ったサーファーやその友達がボランティアに来てくれました。それだけでなく、仙台で被災した教え子のサーファーたちも秋田に来てくれたんです。被災し家を失った子もいるのに「地元の海ではまだ海水浴ができません。海で遊べるようになるまで、秋田での活動を手伝いに行きます」と言ってくれました。彼らは3年連続、ボランティアとして、仙台から来てくれたんですよ。本当にありがたいことです。

廣波 さすが及川先生。友達を作るのが得意な彼ならではのエピソードですよ。被災地から来た及川先生だからこそできたんじゃないかと思います。

及川 震災発生直後から、被災地を何度も訪れ、その際に東北各地の避難所などで、どんな困難な状況でも前向きに活動する子どもたちの姿を見てきました。2012年になると被災地の状況はだいぶ変わり、避難所から仮設住宅に移った人たちもたくさんいる中で、残念ながら子どもたちの遊び場（公園）は、瓦礫置き場などに大きく変化して、遊び場を失った子どもたちが大勢いたんです。走って遊べる場所がどこにもない。そんな子どもたちに、今一度、大自然の中でおもいきり遊んでもらえたらどんなに素晴らしいだろうと、思ったのです。それで岩手・宮城・福島の子どもたち50人をバスで秋田に連れてきて、秋田の子どもたち50人と一緒に海や山や川で「子どもサマーキャンプ」に参加してもらい、交流をしました。

——当初から大学の取り組みとして実施していたのですか？

及川 いいえ、「子どもサマーキャンプ」は2011年から2013年までは、大学の授業や自分の研究としてではなく、純粋に〈震災の復興支援〉として開催してい

ました。そして、その活動をバックアップしてくださったのは、200社以上の秋田県の民間企業と個人の皆さんでした。協賛金を活動資金にすることができました。

廣波 当時、学生や教員はボランティアとして参加していましたね。私自身も様子を見に行く程度で、及川先生のことを「熱心な先生だな～」と感心していましたから（笑）。この取り組みに〈防災〉の考えを積極的に取り入れたのは、2014年からです。キャンプでいかだ作りやサーフィン、地引網などをして楽しみながら、水の事故から命を守る「水上安全法」や、本学で行う「災害救護訓練」など、日本赤十字社のノウハウを組み込むようになりました。それが「防災キャンプ」という今の形につながっているわけです。私もまんまと及川先生に取り込まれてしまいました（笑）。今は赤十字地域交流センターのセンター長として、防災キャンプの取り組みを統括しています。

及川 現在行っている取り組みのひとつが「赤十字みんなの防災キャンプ」です。大規模災害の発生でライフラインが断たれた状況を想定し、学生が1泊2日の防災キャンプを実施しています。避難所設営や炊き出しなど、避難所運営に必要な知識をキャンプを楽しみながら学ぶことができます。夏に実施する『赤十字みんなの防災サマーキャンプ』では、地域の小学生を対象に1泊2日の防災キャンプを行います。学生には「赤十字みんなの

防災キャンプ」で得た知識と経験を生かして主体となって動いてもらい、子どもたちにキャンプの楽しさや防災のノウハウを伝えるんです。

廣波 学生が子どもたちに〈教える〉というより、〈見守る〉という表現の方が合っていますよね。学生たちは、自分たちが体験して楽しかったことを子どもたちといっしょに実践するんですから。

及川 そうですね。学生自身が楽しくないと子どもたちを楽しませることもできないので、避難所の設営にしても〈電気も暖房もない中でどうすれば寒くないか〉、〈硬い床の上で寝るにはどう工夫したらいいか〉、〈マッチがないときにどうすれば火を起こせるか〉といった課題は、キャンピングのノウハウがあれば簡単に解決できるのです。それを学生自身が面白いと感じることができれば、子どもたちにも防災を学ぶ楽しさが伝わるはずですよ。経験は心を強くします。災害時の困難を疑似体験することで、万が一災害にあった時にも心に余裕が生まれます。こうして楽しみながら覚えることが、災害発生時のストレスを軽減するのにも役立ちます。そんな考えから、フィールドを野山から避難所に置き換えて、そこでキャンプを営みながら非常時でも、快適な生活を送ることができる術を学ぼうというのが防災キャンプなのです。災害時の避難生活をキャンプを通じて疑似体験することで防災を自分のこととして考えるようになります。そして、防災に必要なこ



川でのカヌー体験プログラムも実施



2016年の防災キャンプフェスでは、本学グラウンドを会場にさまざまなイベントを開催した

私たちの使命は、東日本大震災をこれから先も語り継いでいくこと。

とは「想像する力」です。想像し課題を発見します。「想像する力」で発見した課題に対して、どうしたら「命を守れるのか」、「備えになるのか」その対策について考えます。今度は、考えたことを実行してみます。成功と失敗の繰り返しを通じて災害時に必要な「判断する力」を養うことができます。

廣渡 通常の避難訓練の場合はマニュアルがあって、先生から「こうしなさい」と教え込まれるので、あまり楽しくないんですよ。キャンプなら楽しいし、楽しみながら学んだことは結果的に災害時にも役立つ。マニュアル通りにやるという避難訓練の方法ではなく、「楽しんで覚えたことを応用してみよう」という導き方が大切なんですね。

及川 決められたことばかりしていると、あらかじめ準備した物がないといざというときに動けません。私たちの考え方は、〈物がないからできない〉のではなく、〈ないならどう工夫するか〉なんです。学生たちはそれを実践することで考えることに慣れ、突然の出来事にも対応できるようになります。

廣渡 2016年には新しい取り組みとして、秋田魁新報社が企画し、地域の人々を対象とした『防災キャンプフェス』に

本学も参画しました。本学のグラウンドを会場に、日本赤十字社秋田支部、秋田赤十字病院などの協力を得て、及川先生の防災トークや救命方法の体験、被災時の炊き出し、傷やけがの応急手当方法、テント設営体験などを実施し、約4,500名の市民が来場してくださいました。秋田県内の飲食店によるグルメブースや、キャンプ用品・アウトドア用品の展示販売もあって大いに賑わいましたね。

—— 震災の復興支援から始まり、今では地域の人々も巻き込んだ防災イベントに発展しているわけですね。今後の展開についてどう考えていますか？

及川 災害時の避難所は、単に避難所内の運営をするだけではなく、地域住民を含めた被災者の支援機能も持たねばなりません。今後、この防災キャンプが全国的に広がり、もっと多くの防災リーダーが各地に誕生して連携すれば、災害時の被災者支援拠点としての避難所が大きく変わると思います。私の願いは、未来の主役（子どもや大学生）が中心となり、さまざまな世代の人たちと触れ合いながら、災害に強い街づくりを目指すことです。

廣渡 この取り組みをきっかけに、他大学の学生さんが積極的に本学の防災キャ

ンプに参加してくれるようになり、規模はどんどん広がっています。

及川 今の活動があるのは、「人」と「人」とのつながりのおかげですね。震災のときも、「残されたのは人のつながりだけだった」という話を聞きます。私自身も「人」とのつながりがあったからこそ、これまでの活動があると思っています。その大切さ、ありがたみを防災キャンプを通して感じていただけるのではないのでしょうか。

廣渡 防災キャンプは授業ではありませんが、授業では決して得られない貴重な学びを体験することができます。それは命を守る方法であり、命を助ける方法。まさに「生きるを支える人になる」ですね。

及川 2011年から今日に至るまで、必ず使っているキーワードが「東日本大震災」です。月日を重ね、語られなくなってきた「東日本大震災」をこれから先も語り継いでいくことが、私が秋田にいる意味だと思っています。このキャンプを通して一人でも多くの人に防災の意識が高まればいいと思います。そうすれば、災害が起こったときに命をつないでいけると思います。今後も私は私なりの方法でずっとこの活動を続けていきたいです。



及川 真一 ○おいかわしんいち
赤十字防災ボランティアステーションリーダー／介護福祉学科 助教。担当科目は「生活支援技術Ⅱ」「コミュニケーション技術Ⅰ」「ボランティア活動論」。住民参加型のまちづくりのワークショップ、地域活性化事業などに携わる。社会の課題解決のため、大学生を主体としたボランティア活動を行い、地域に根ざした教育活動を展開している。学生時代から始めたサーフィンの経験を活かして、海で行う野外教育も取り組んでいる。



廣渡 太郎 ○ひろわたり たろう
赤十字地域交流センター長／看護学部 教授。看護学部や大学院での英語科目を担当するかわら、センター長として「赤十字みんなの防災キャンプ」をはじめとする地域貢献事業や国際交流事業、および、「災害救護訓練」や「赤十字国際人道法教育フォーラム」などの赤十字に関する事業を統括している。



体育館に避難所を作り、災害時を想定した防災教育を受けることもたち

【防災キャンプの始まりと経緯】

経緯

2011

こどもサマーキャンプin秋田

東日本大震災の影響で大自然から遠ざかりつつある秋田のこどもたちを秋田市浜田の桂浜海水浴場に集め、大自然から学ぶ体験プログラムを行いました。こどもたちや保護者の皆さん約250人が参加し、ペットボトルのいかだ作りや地引綱などを楽しみました。



2012

こどもサマーキャンプin秋田

「仮設住宅の建設やがれきの山で遊び場のなくなった被災地のこどもたちに、大自然の中で思いっきり遊んで欲しい」。そんな願いを込め、宮城県・岩手県・福島県の各県から50名を秋田に招き、海、山、川で秋田のこどもたちと交流を行いました。



2013

こどもサマーキャンプin秋田

「他県から秋田に避難しているこどもたちが生活に馴染めていない」という事実を知り、これまで行ってきた野外教育プログラムのもとで、他県から避難しているこどもたちと秋田県のこどもたちとの交流を図るため、海の家を貸し切ってサマーキャンプを行いました。



【2014年からの防災キャンプ】



2014 こども防災キャンプ

2014年からは、2011年から実施してきた「こどもサマーキャンプ」に防災教育を組み込むようになりました。大学の体育館やグラウンドに避難所を設営し、火の起こし方、ご飯の炊き方、救急救命、応急処置などを楽しみながら学べるプログラムとしました。



2015 みんなの 赤十字防災サマーキャンプ

日本赤十字社秋田県支部の協力を得て、学生ボランティア50名が防災キャンプで得た知識と経験を活用し、小学生の参加者とともに大規模災害発生時を想定した1泊2日の防災キャンプを行い、楽しみながら身に付く防災教育を行いました。



2016 AKITA防災キャンプフェス

秋田魁新報社が企画し、秋田県・秋田県教育委員会・秋田市消防本部の後援を得て、誰でも参加できるイベントを行いました。本学教員による防災トーク「生きるためのワークショップ」として救命方法の体験や炊き出し、テント設営体験などを参加費無料で実施し、2日間で約4,500名の来場がありました。



学生インタビュー

介護福祉学科 1年 佐川 優佳さん



介護の道へ進んでからも 続けていきたい“和太鼓”



私は「やまばと太鼓」という和太鼓のチームに所属しています。始めたきっかけは、中学校のときに授業で和太鼓の演奏を目にしたこと。「カッコいい!」と興味を持ち、中学3年生から参加するようになりました。一生懸命練習して、1年で全国大会に行くことができました。大会のほかにも、結婚式の披露宴や災害イベント、企業の

パーティーなどに呼んでいただき演奏することもあります。竿燈祭りではお囃子としても参加しています。

「やまばと太鼓」は、元々やまばと保育園の卒園児が中心でしたが、現在は年齢問わず希望者が参加できるようになりました。4歳から60歳代まで幅広い年齢の方々が所属しています。私よりも年下の子が多

いので、いつも元気をもらえます。練習は週3回。大学の試験がある時期は休むこともありますが、できるだけ参加して叩くようにしています。将来は介護関係の仕事に就きたいと思っていますが、仕事をしながら太鼓も続け、年間の演奏会には毎年参加していきたいです。



学食人気メニュー

SCHOOL CAFETERIA

※ 2017年2月時点の情報となります

日替りランチ 300円

日替りランチは、売り切れ必至の人気NO.1メニュー! この日は、大きなコロッケがなんと2個! ご飯は秋田県内産「あきたこまち」を使っています。



日替り麺 280円

この日は「シーフードカレーうどん」。カレーの辛さと温泉卵のまるやかさが絶妙にマッチしています。これで280円だなんて、お得すぎる!



ラーメン 300円

飽きのこないあっさり味でつつい食べなくなっちゃう、定番の醤油ラーメン。大盛りは+100円です。



教員のつぶやき

つぶやき人

看護学部
講師 重川敬三

男 性6,788歩(全国44位)・女性6,028歩(全国47位)、これは秋田県民が一日に歩く歩数の平均値(全国順位)です(平成24年の国民健康・栄養調査より)。さらに、秋田市では、男性が6,609歩、女性が5,284歩という数値が示されています。

これらの結果を受けて秋田市では、健康づくり、特に体力の維持増進を目指した取り組みとして「歩くべ!あきた!」の事業を展開しています。私も「健康あきた市21推進会議」の身体活動分野を担当する委員としてお手伝いさせていただいております。この試みは意図的ではありますが、参加者の皆さんの競争心を

くすぐりながら、歩行数の向上を目指して行きましょうというものです。今年で2年目の実施に入っておりますが、一日の歩行数の平均が9,000歩~10,000歩を示し、参加者からは身近な実感として体重の減少や心身の快調さなどの感想が聞かれ、満足のいく結果が現れつつあります。

歩くこと、すなわち身体活動量が低下することによる弊害は、一言で言えば「動

脈硬化」の亢進です。動脈を硬化させる原因となる障害が生活習慣病、最近ではメタボリックシンドロームあるいはロコモティブシンドロームと呼ばれているものですが、それぞれの要因は高血圧や高脂血症・糖尿病・肥満などです。10年ほど前にメタボリックシンドロームの概念が示されてからは動くこと、すなわち身体活動量を増加させることにより発症を遅らせることができ、予防に役立つことが証明されてきました。私たちのグループ



が行った研究においても、一日8,000歩以上のグループは、それ以下の歩数のグループに比べ発症のリスクを少なくとも35%減少させることができる、という結論に至っております。

さて、「歩くべ!あきた!」です。やはり歩行は、身体活動量を向上させるには最も身近なものです。時間がないとか疲れているとか、何をやって良いかわからないとか言わないで、自分自身ができる動きや運動を1分でも2分でもチャレンジしてみたいかがでしょう。それらの動きや運動は自身の身体を裏切ることはありませんから。

2017年3月 本学で開催するイベントのご案内

高校生・保護者のための

実際に見て・聞いて・体験してみよう!

Open Campus 2017.3.18 sat 10:00 ~ 13:00



看護学科



介護福祉学科

実施予定内容

- 各種学科紹介と教育内容
- キャンパスツアー（学内見学）
- 学生募集・入学試験の説明
- 個別相談
- 模擬授業（講義や体験）
- 先輩たちと語ろうコーナー



防災を学ぼう!



先輩たちにいろいろ聞いてみよう!



模擬授業を体験してみよう!



日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学 公開講座 II

身近な人が認知症になったら

～認知症になっても安心して暮らせる地域を目指して～

どなたでもご参加いただけます。
ぜひお申し込みください。

1回目

「認知症の手がかりと対応について」

日時：平成29年3月3日(金) 16:00～17:30 (受付15:30)

会場：日本赤十字秋田看護大学 152講義室
日本赤十字秋田短期大学

講師：日本赤十字秋田看護大学教授（老年看護学）
同大学認知症看護認定講師コース責任者
高田 由美



2回目

「認知症サポーター養成講座」

日時：平成29年3月18日(土) 10:00～12:00 (受付9:30)

会場：日本赤十字秋田看護大学 301講義室
日本赤十字秋田短期大学

講師：日本赤十字秋田看護大学助教（公衆衛生看護学
キャラバン・メイト
萩原 智代 / 在宅看護論）



上記イベントの詳細・参加お申込みは本学公式サイトをご覧ください。

学報「カリヨン」NO.6

■発行日/2017年3月1日 ■発行/日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学
■編集/日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学 情報・広報委員会
〒010-1493 秋田市上北手猿田字苗代沢17番地3 TEL.018-829-4000

<http://www.rcakita.ac.jp/>